「試論・II」
「日本語を話す弥生人は何処から来たのか？」

徐福が弥生人（日本人）！

丸地三郎

２０１２年１月

目次

私達は誰？　どこから来たのか？

- 弥生時代の始まり　不思議な大変革の発生
- 中国で実在が証明された歴史的事実---徐福渡航
- 「史記」の記述内容
- 徐福一行の出立・出帆した地

弥生前の状況から徐福渡来について

- 縄文終期、弥生前の日本の状況
- 北九州北部の状況
- 徐福到来直前の日本
- 徐福一行の到着
- 徐福一行渡来直後　その①
- 徐福一行渡来直後　その②
- 徐福、秦に戻りの始皇帝に会い、武器と持ち再度日本へ

徐福一行の人員構成　その①

その②

その③

弥生時代の始まり

- 人口の増加率

弥生時代を拓いた渡来人

徐福の時代までの中国についての理解

- 徐福の時代までの歴史　その①基礎事実
- その②-1　稲作の発祥と伝播(日本へ)
- その②-2　中国の古代稲・稲作農耕文化に関する遺伝・育種学及び考古学的調査研究
- その②-3　稲作・水田に関して

神話の時代から夏・殷・周を経て三国志の時代まで

- 春秋時代の主要国の位置関係
- 中国の古代史　神話の時代
- 中国の古代史　歴史時代
- 大人数の移民が可能な船舶・航行技術があったのか？
- 中国の古代史　まとめに代えて:中国民族と言語について

渡来人のＤＮＡ遺伝子　その①

- 徐福一行の民族・ＤＮＡ遺伝子　その②

弥生時代初期の大変革は、東夷・倭人＝弥生人の民族大移動による

私達は誰？　どこから来たのか？

- 日本語を話す私達日本人は、いつどこから来たのだろうか？縄文土器を作った縄文人がそのまま、日本人になったわけで無い。縄文人は日本語を話していない。弥生時代から渡来した人達が日本語を話し、縄文人との混血もあったようだが、現代の日本人になったようだ。その渡来人はどこから来たのだろうか？この疑問が、この記述の主テーマです。

- この弥生時代の始まりの時期は、世界の古代史の中で、極めて特異な事象が起きています。それは、石器時代から青銅器時代を飛び越して、一気に鉄器時代にジャンプ・アップしている事です。日本の歴史書は、この事象を明確に説明できていません。大変大きな事象ですが謎とされるか、無視されています。

- 一方、中国の考古学者と歴史家は、同じ時期の興味深い話を調査し、近年、ある霧のかなたなってしまった話が、遺物も発掘され、歴史的事実であることが証明された。

- 説明のつかない日本史の謎、「弥生時代の開始時期」と、近年中国で歴史的事実と判明した事実について考察し、この二つのことをリンクして、日本語をはなす日本人のルーツを探ります。

弥生時代の始まり―不思議な大変革の発生

・世界の古代史では、石器の時代の次は、青銅器の時代でその次に鉄器の時代が来る。処が、日本の古代史では、縄文時代の石器から突如、青銅器を飛ばして、鉄器の弥生時代に移行したと云う不思議な事態が発生していた。

・この突然の移行は、他の文明では有り得ない現象と云える。

・何故そんな現象が起きたのかを知るために、まず、この時代背景を整理してみる。と云うのも、1960年代の歴史の教科書と最近の歴史研究の成果では大いに違いが生じているから、私を含め古い歴史教育を受けて、時間の経った人には、見直しが必要がありそうですので。

・縄文時代は、食物の採集と狩猟中心の生活と云われてきたが、縄文中期(紀元前3000年~4000年・今から五~六千年前)から、栗や栃・椎などの硬果植物の栽培を行い、一部の地域では焼畑農業を行うことで、植物性の主食を確保し、漁労・狩猟で栄養価の高い食料を得て、人口を拡大していった。不安定な採集ではなく、安定した栽培へ移行し、縄文時代の初期の2万人から、中期の日本の人口は、増加し、25万人とみなされている。

・縄文時代の人と品物の流通は、かって想像されていたよりもダイナミックで広域だったし、海上の航行が確実なものとして行われていた事が明確に示されている

- 石器の材料となる黒曜石の産地は限定されているが、黒曜石の流通範囲は広範囲に渡っている。例えば、北海道の白滝産の石器は、日本海を越えて、サハリン・シベリヤ東岸の遺跡で発掘されているし、津軽海峡を越えた青森の三内丸山遺跡でも発掘されている。伊豆の神津島の黒曜石が、関東一円と中部地方まで流通していた。

・三内丸山遺跡の直径1m、長さ10mの巨木を利用した建築技術があったことも実証されている。

・縄文土器、漆器、布と巨大建築物、海を航行する船の技術を持ち、集落を構えた豊な社会生活が営まれていたのが縄文時代の姿。併し、青銅器・鉄器は使われておらず、石器の時代が続いていた。

・縄文時代の文化は、かって筆者達が教わった低レベルの生活ではなく、食物を栽培し、安定した食生活をしており、ダイナミックに移動・交流し、村落を形成する高い文明を築いてきたことが判明してきた。

・処が、紀元前200年頃、突然、青銅器と鉄器が使われ始めた。日本の広範囲の地域で、一気に、水田稲作が始まった。弥生式土器が使われ、瓶棺による埋葬方式が始まり、その瓶棺からは、縄文人とは体型の異なる、長頭・長身の遺骨が発掘される。土器は、装飾せいの高い縄文式から、シンプルな弥生式に代わった。

・紀元前200年頃、日本で発生した、この突然の文明の移行時には、どんなことが起きていたのだろうか?

中国で実在が証明された歴史的事実---徐福伝説

・この突然の変化をもたらした、弥生時代初めの時期の日本を取り巻く環境に目を向けてみると、この紀元前２００年の頃の出来事として、中国に関連しそうな歴史的事実があり、「史記」に記載されている。

・中国では、夏・殷・周と云う古代王朝から混乱の春秋戦国時代を経て、紀元前２２１年に秦の始皇帝が、中国を再統一を行った。

・その秦の始皇帝は、徐福に命じて、五穀と百工と３０００人の子供を乗せた船団を、紀元前２１９年、山東半島の瑯琊から送り出した。一度帰国した徐福を、弩などの武器を持たせ、紀元前２１２年、再度、出航させた。

・この事実は、７０年も経ない時点で、司馬遷の史記に記録されている。「史記」はが認める第１級の歴史書であり歴史資料で、高い信憑性がある。

・その事実を裏付ける発見が近年あった。１９８２年、徐福の出立した徐福村が発見され、近くの王坊村からは、大量の造船を行った遺跡と２０００年前の大量の造船用の木材が発掘され、史記の記録と遺跡が一致し、徐福の渡海は、歴史的事実を裏付けた。

・又、史記の別の記述では、徐福が渡海先で、「平原・広澤を得て王となり、帰らず」と記されている。この徐福の渡海先を後に、調べられたことがある。

・西暦２００年頃、三国志のうちの一国の呉は、将軍と船団を送り出し、この徐福の渡海先を捜索させた。その結果、見つからず、台湾の原住民を代わりに捕虜として帰国し、呉王に不首尾を問われ、死刑となった史実も記録されている。

・日本では、徐福伝説と呼ばれる不思議な言い伝えが、各地に残っている。それは、いずれも、徐福と言う名前の人が、その土地に、漂着したというもので、その伝説の残されている地域は、九州から黒潮の流れる太平洋岸の地域、日本海側の対馬海流の流れ着く秋田、青森までの広範な地域、合計２０ヶ所に及ぶ。尚、韓国でも、済州島など2箇所にあり、徐福が立ち寄ったが、先に行ったとの伝説が残る。

・２０ヶ所の地域を見ると、後背地に山がそびえ、水田耕作が出来る平地が広がっている処が多い。

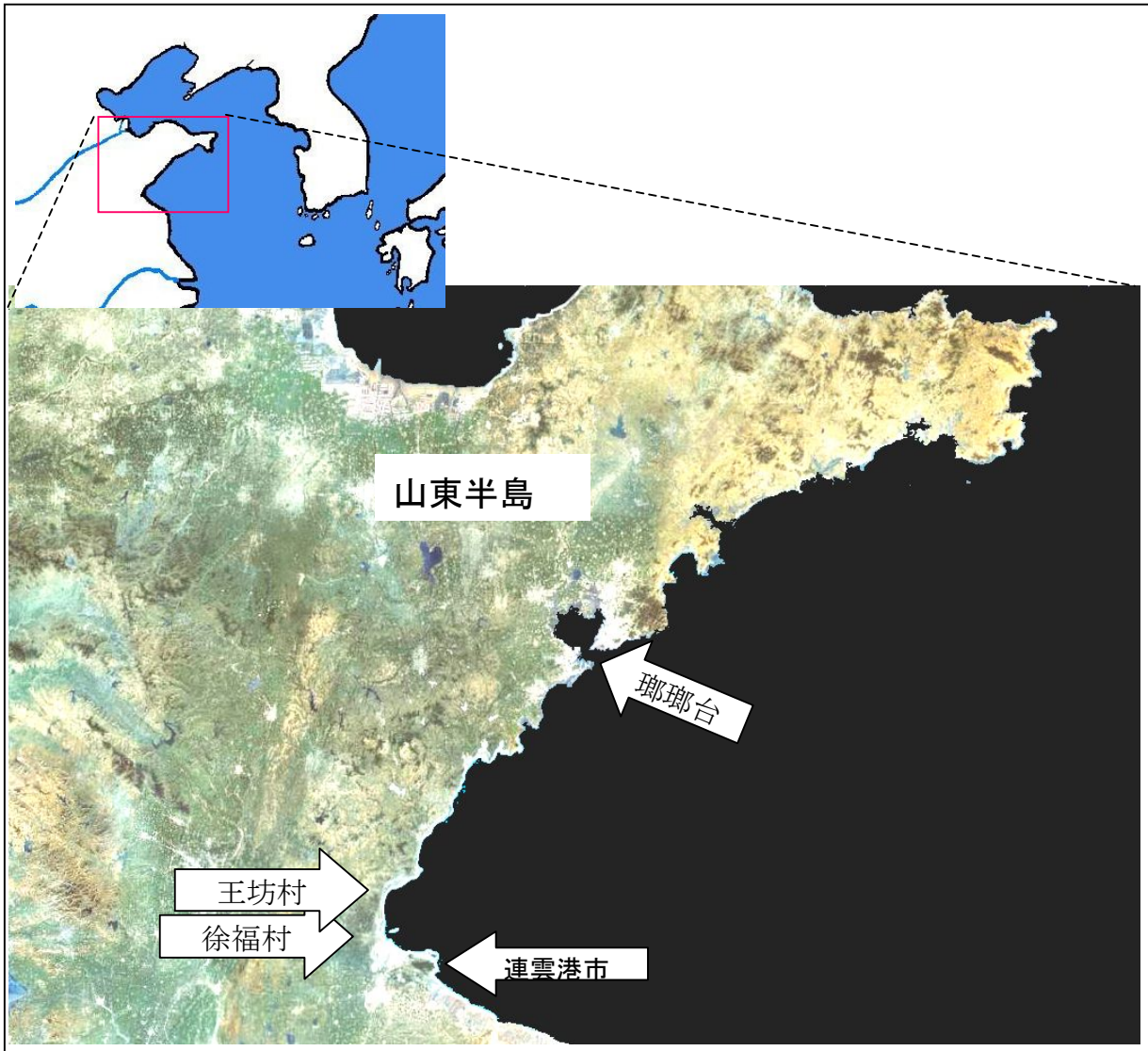
・日本では、単なる伝説と見られ、歴史としては、まともに取り上げられていない。日本人にとっては、中国服を着て中国語を話す人間が、我々、日本人の祖先とは、到底思えないと言う感情が、伝説に留めている要因と推測する。

・中国では、船団が出航したことが事実となったが、日本ではあいまいな伝説と徐福は云われている。併し、この紀元前２００年頃に、歴史的事実として、日本各地に、水田稲作が一気に広がり、青銅器・鉄器が伝わっている。

史記の記述内容

- 秦始皇本紀に3ヵ所に登場する。
  - 始皇帝二八（紀元前219）年
    - 斉人徐市等上書して言う、海中に三神山有り、名つけて蓬莱・方丈・瀛洲と曰ふ、僊人之に居る。請ふ斎戒して童男女とともに之を求むることを得ん、と。之に於いて徐市をして童男女数千人を発し、海に入りて僊人を求めしむ。
    - » 徐市＝徐福　僊人＝仙人
  - 始皇帝三五年（BC212）年
    - 徐市等は費やすこと巨万を以て計えども、終に薬を得ず。徒に姦利をもて相告ぐること日に聞ゆ。
  - 始皇帝三七年（BC210）年
    - 方士徐市等、海に入りて神薬を求め、数歳なれど得ず。費多く。譴められんことを恐れ、乃ち詐りて曰く、蓬莱の薬、得可し。然れども常に大鮫魚に苦しめらる。故に至ることを得ざりき。願わくは善く射るものを請ひて與に倶にせん。見はれなば、則ち連弩を以て之を射ん、と。
- 淮南衡山列伝第五八の伍被の供述書（紀元前122年頃）
  - 昔、秦は先王の道を絶ち、（中略）又、徐福をして海に入って神異の物を求めしむ。還りて偽辭を爲して曰く、「臣、海中の大神を見る。言って曰く、「汝は西皇の使か」と。臣答へて曰く、「然り」と。「汝は何をか求むる」と。曰く、「願わくは延年益寿の薬を請はん」と。神曰く、「汝が秦王の礼薄し。觀ることを得れども取ることを得ず」と。即ち臣を従えて東南のかた蓬山に至り、芝成の宮闕を見る。使者あり、銅色にして龍形、光上つて天を照らす。是に於いて臣再拝して問うて曰く、「宜しく何を資つてか以って獻ずべき」と。海神曰く、「令名の男子、若び振女と百工の事を以てせば、即ち之を得ん」と。秦の皇帝大いに説び、振男女三千人を遣り、之に五穀の種と百工とを資して行かしむ。徐福、平原広沢を得、止まり王となりて來らず。是に於いて百姓悲痛し相思いて、乱を爲さんと欲する者、十家にして六あり。
- 史記の記載から、巨万の費用をもって準備を整え、徐福一行が、数千人の子供達を連れ出航した。年月が経った後に、何故か、徐福が一度戻り、今度は、武器を携えて再び出航したことが判る。淮南衡山列伝の記述は、伝聞を記したもので、脚色された部分が目立つが、振男女三千人、五穀の種と百工は具体的な記述。

徐福一行の出立・出帆した地



- 徐福一行の中国出帆した地は瑯琊台と云われる。
- 山東半島の付け根の部分の南に、徐福の故郷の江蘇省韓愈県金山郷の後徐阜村、かっての徐福村がある。
- 徐福村の北東35km程の地に王坊村があり、2000年以上前の大量の造船用材木を含む、造船所の遺跡が発掘され、徐福一行の船を建造した処とみなされている。
  - 発掘された同時期の船は、長さ30m、巾8m、積載量60t、百人のり。
  - 秦と漢の時代、水軍の主力は楼船でした。楼船とは、一種の船上に楼を建てた高さが十余丈(30m強に達する大型の戦船。

縄文終期、弥生前の日本の状況

- 縄文終期の日本の概況
- BC1000年頃は、、日本の住民は、縄文人が、日本全国に居住し、、穏やかな暮らしをしていたものと推測される。
- 安定した食料確保 ：園耕 ：栗・栃・椎・どんぐり など堅果植物の栽培し、、焼畑農業で、既に、熱帯ジャポニカ米を栽培していた。漁労も行われていた。
- 活発な移動と交易：陸上の長距離移動のみならず、海上移動も行われており、糸魚川で産出したヒスイが、北海道から九州の縄文遺跡で発見されており、陸上と海上の移動と交易が裏付けられている。
  - 鋭利な石器の材料となる黒曜石は、採集地の限らている。その遠く離れた産地の黒曜石が各地の遺跡で発見されている。神津島産のものが三重県で発掘されている。船舶を使い離島から黒曜石が運ばれている事実は、縄文時代に、海洋を航行し、交易が行える技術・社会があったことを示している。（北海道・白滝、本州・神津島、箱根、和田峠近隣、島根県・隠岐島、九州・大分姫島、佐賀県・腰岳、長崎・松浦、壱岐島な
- 定住し、集落を形成し、社会生活を営んでおり、集落を治める長と組織があったものと推定される。又、戦乱・殺し合いの痕跡が縄文遺跡にはないことを、留意したい。

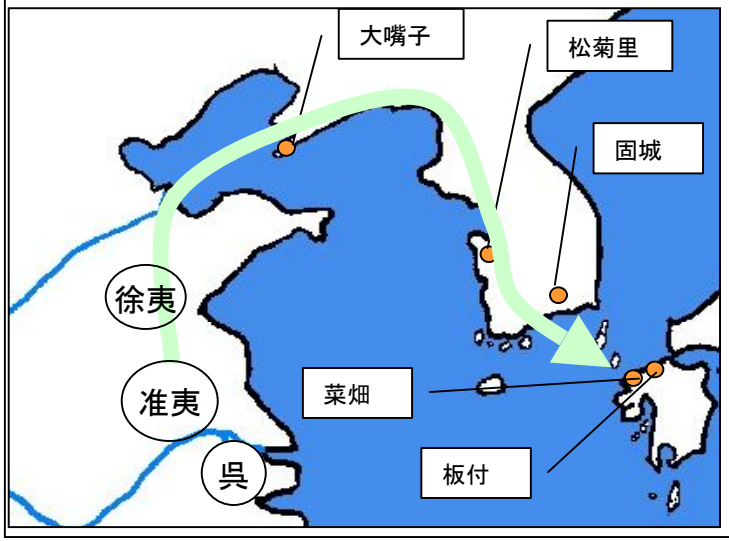
日本最大規模の黒曜石原産地である白滝産は、道内の旧石器遺跡（白滝遺跡群）をはじめ縄文時代遺跡にも多用され、30センチを越える大型石器（両面加工尖頭状石器）も製作されている。また白滝産は日本海を越えて、対岸のロシアやサハリンでも使用されていることが、昭和63年（1988）立教大学の鈴木正男グループの分析で確認されている。さらに津軽海峡を越えた青森県の縄文前～中期の遺跡（三内丸山）からも発見されている（金山喜昭「石材」『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会, 1992）。

3-3　東北地方南部

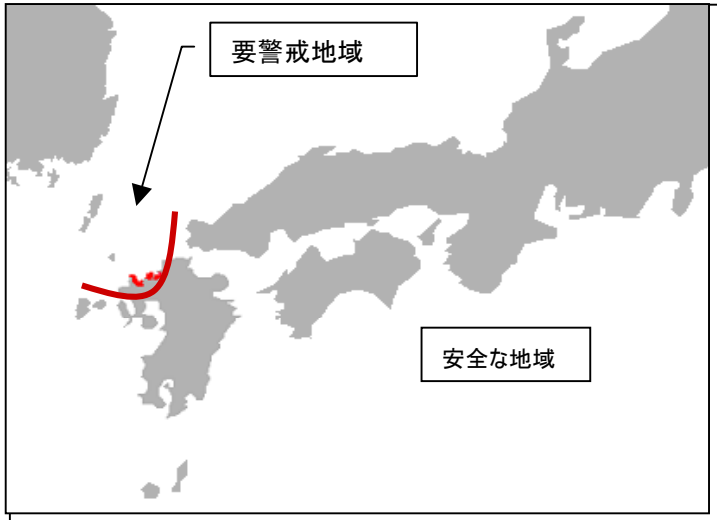
現在6カ所近くの黒曜石原産地が知られ、月山（山形県）、板山（新潟県）が著名である。佐渡島にも黒曜石原産地存在し（中略）藁科哲男の分析で、佐渡産の黒曜石が青森県山内丸山遺跡で確認されたという。

北九州北部の状況

- BC1000年頃、北九州西北部(唐津・前原・博多)では、外の地域と同様に、縄文人が、栗・胡桃・栃や豆・エゴマ等を栽培する園耕の時期に入っており、安定した食料供給を得ており、定住していたもの推定される。温暖な気候に育まれ、漁労と交易を加え、豊な部落・集落が形成されていたものと推定される。
- 遼東半島の大嘴子、韓国の松菊里、固城に米粒の形状が極短い品種の稲作の遺跡がある。この短粒と同じ品種の遺跡が、北九州の唐津の菜畑遺跡、福岡の板付遺跡に残されている。いずれの遺跡もBC900年からBC500年に遡ると云われている。なお、その他の地域からは、これよりも、やや長い米が出土する。
- この短粒の品種の稲を持って移動してきたのは誰か？
- この頃、中国では、殷(商)を周が倒し、周王朝が成立した。東方の部族の総称を東夷と云い、その東夷が、殷の遺族と手を結び、周と敵対し、大きな戦乱を重ね、その後に敗退し、BC1000年から900年、徐夷滅亡、800年から700年淮夷滅亡、473年、呉滅亡。
- 戦乱に敗れ、民族滅亡に至った徐夷・淮夷・呉の人々が、朝鮮半島へ、そして北九州へ逃れてきたものと推測される。この移動では、移住先の地域を圧倒するような武力は持たず、先住民との融和を行いながら、定住していったものと推測する。
- 北九州のこの地域では、既に、豊な集落を形成していた縄文人の中で、渡来人は稲作と青銅・鉄器など高度な技術をもつ者として優遇され、取り入れられたものと思われる。
- 稲作を得て、食料供給が多くなり、勢力を強めた集団の主導者は、渡来人では無く、縄文人であった。唐津・福岡のこの時期の遺跡では、渡来人のもたらした支石墓の主の骨は縄文人のもの。
- 九州北部・玄界灘周辺では、縄文人主体で、渡来の技術をもった集団が勢力をもって跋居していた。



徐福到来直前の日本



- 縄文人が、園耕・焼畑農業を行い、活発な交易と交流をしながら、日本全体に広く居住していた。焼畑農業では、熱帯ジャポニカ米を栽培。（このことが、日本での水田耕作の急激な普及の要素となっていた。）
- 縄文人達は定住し、集落を形成していたが、互いに戦争を仕掛けたような形跡は無く、平和な、人殺し用の武器を持たない人々が、日本各地に、暮らしていた。
- その中で、北九州の玄界灘沿岸地方には、別の事態が発生していた。中国から韓国を経由した東夷が渡来。その渡来人のもたらした水田耕作や中国の青銅器などの技術を取り入れた縄文人の部族が人口を増やし、大きな勢力となっていた。その勢力は、中国から渡来の武器と戦闘力を保持していた。
  - 唐津市の菜畑遺跡・福岡市の板付遺跡の稲の品種が後に全国に普及した品種と異なる短小タイプであった。（後記）
  - 放射性炭素14による年代測定では、同地域の土器（縄文式とは異なる弥生式初期）の年代を、BC800年に遡る。
  - 又、同地区の遺跡の支積墓に埋葬されていた遺骨は、渡来人ではなく縄文人の特徴を示している。これは、その地区の首長が縄文人であったことを示している。
  - 同様に、土器の様式・年代・支積墓に埋葬された縄文人は瀬戸内海沿岸でも発見されている。

徐福一行の到着

- 紀元前219年　全長30m、100人乗り、（子供30人、百工30人、武人20人、船員20人）の船、100隻が山東半島とその南神雲港近辺から、秦の始皇帝の見送りを得て、出帆。（人員・隻数は推定）
- 南へ進路をとり、黒潮にぶつかり、黒潮に乗って、一路、日本へ。一行は、一ヶ所に上陸したのではなく、伝説の残る20ヶ所程の各地に上陸したものと考えられる。
- 一行は決して、漂着したのではなく、後背地に山を控え、稲作に適した平原を選択し、上陸を果たしている。
- 北九州には、有明海から筑後平野に上陸。

徐福一行渡来直後　その①

□複数の船団に別れて進行した徐福一行は暖流に乗り、徐福伝説の残る20ヶ所の地域に到着、上陸して、開拓を始めた。

□一行の渡来時の状況は、北九州・玄界灘沿岸の地域と、その他の地域ではかなり様相が異なったものと想定する。（北九州地区に関しては、その②に記す）

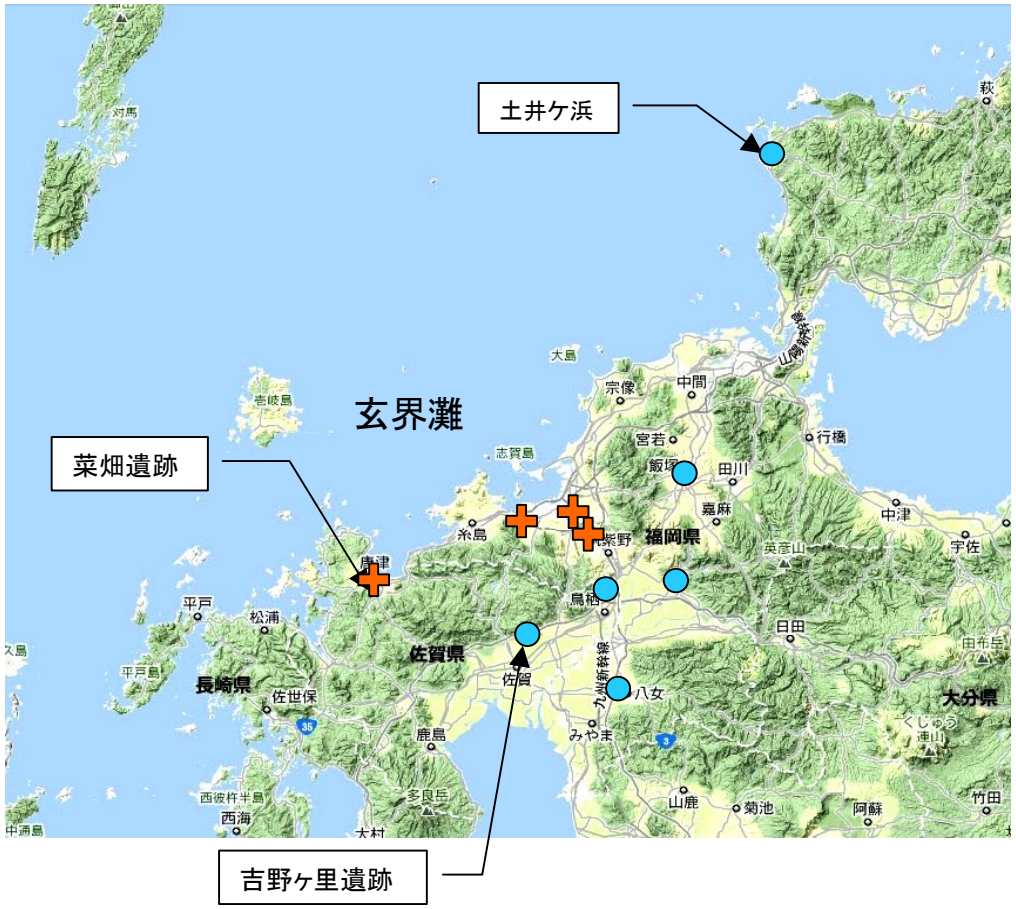
・北九州以外の地域では、園耕・焼畑を行っている縄文人達と生活基盤となる地域となる森林や台地とは、やや異なった、低湿地帯やその周辺に住もうとする渡来人の間で、住み分けが行われ、大規模な戦乱は無かったものと考えられる。

□例え、戦いが発生したとしても、片や、対人戦闘用の武器を持たない縄文人と、片や、極限まで進歩した秦の戦闘用武器を携えた渡来人との戦いの結果は明らかで、戦乱にはならなかったと推定。

□渡来人の船団は、九州から、日本海側は秋田・青森まで、瀬戸内海から、太平洋側は熊野・伊勢。伊豆・房総・鹿島までの広い地域で、新技術と五穀の種により、水田を切り開き、稲作を始めた。又、僥倖と言えるような幸運も起こった。渡来人が持参した温帯ジャポニカ米と、縄文人が焼畑で耕作していた熱帯ジャポニカ米とが交配されると、寒冷にも強い品種が生まれた。その品種によって、一気に稲作の適地が、北に広がった。

□弥生文化（稲作と青銅と鉄の文化）が紀元前二-三世紀に日本全国に一気に広がったとする遺跡の調査がこのことを証明している。

徐福一行渡来直後　その②



□　一方、北九州・玄界灘沿岸では、既に水田稲作が始まり、中国での戦乱体験と兵器をもった渡来人を傘下にもつ集落・部族が存在していた

□　そこで、徐福一行の主力部隊は、玄界灘沿岸を避け、有明海側から筑後平野に上陸、水田を開拓。　食料生産の目処を立て、十分に勢力を広げた。

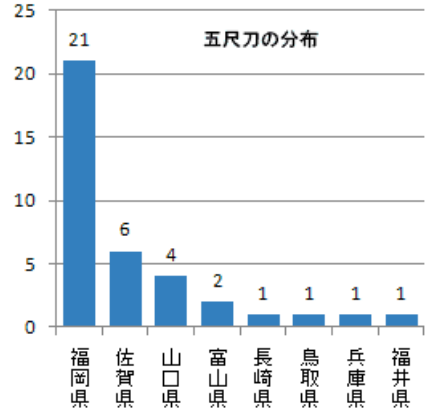
□　筑後平野から大宰府を通り、博多のある福岡平野に抜ける平坦地・(水縄断層帯)がある。この水縄断層帯の北側には、玄界灘沿岸の縄文人の長を持つグループが居住し、対人用武器(戦争道具)を保有しており、厳しい戦いが起きてしまった。徐福一行は、吉野ヶ里遺跡に見られる逆茂木で敵の侵入を防ぐ環濠集落を築き、侵略への防備を固める事態に至った。

□　本州の山口県の日本海側の土居が浜では、移植した徐福一行の集落が、玄界灘沿岸のグループの襲撃を受け、大量虐殺の被害を受けてしまった。(発掘された遺骨の分析結果は、山東省の遺跡の遺骨と類似)

□　北九州一帯では、先に居住していた縄文人を長とする、中国の武器と戦争の技術を持ったグループとの戦乱で、徐福一行は、進退窮まる状態に陥ったものと推測される。

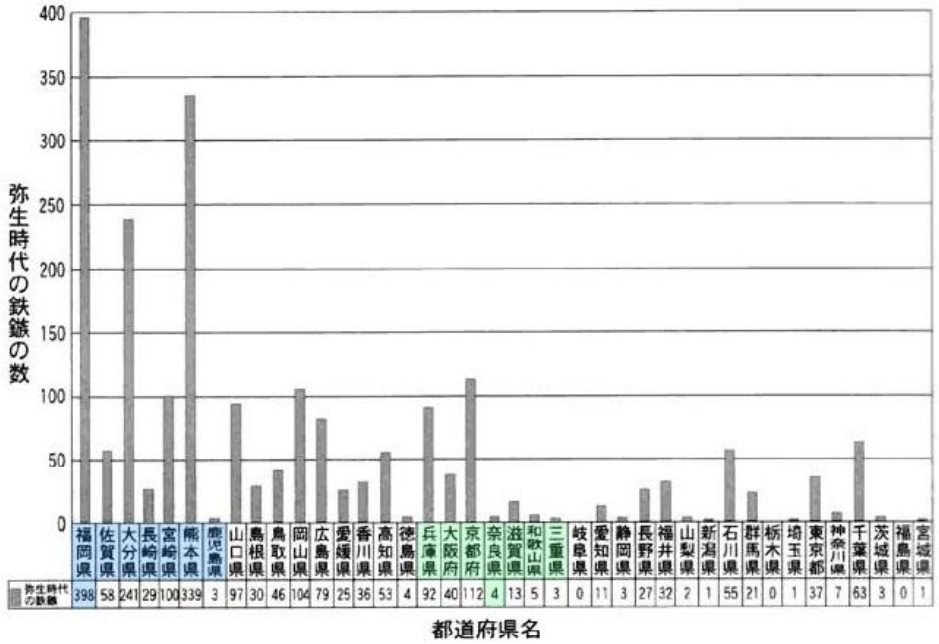
徐福、秦に戻りの始皇帝に会い、武器と持ち再度日本へ

- 紀元前219年に渡来した徐福は、困難な北九州の状況を打開するために、やむなく、9年後に、再び秦に戻り、始皇帝に面談した。状況を話し、支援を求めたものと推測される。
- 史記の記述では、徐福一行の妨げとなったものは大魚であるが、その対応策として準備し渡されたものは、連弩と言う、秦の最強の武器（矢を連続して射ることができるいわば古代の機関銃）。
- 紀元前210年に徐福は、連弩などの強力な武器と軍隊を率いて有明海から筑後平野に再上陸し、縄文人を長とするグループとの戦いに入り、水縄断層帯の南の小郡地区での激戦から北に向かい玄界灘沿岸を掃討した。
- 弥生初期の鉄の武器（鉄の鏃など）の発掘量は、筑後平野、特に水縄断層地帯近辺に多い事は、この戦いの激しさを物語っている。



邪馬台国の会
第279回講演会 史料
「邪馬台国の遺跡・遺物」
から

図２　県別・弥生時代の鉄鏃の数



徐福一行の人員構成　その①

・徐福一行はどんな人達、民族の人で構成されていたのか、推測する。

・史記などの記述から、秦の始皇帝との約束をもう一度、考えてみると、そこには、徐福の卓越した、思慮深い計画が覗える。

－「振男女三千人、五穀の種と百工を献上することで、蓬莱の仙人から不老長寿の薬を受け取る。」これを実行するために、始皇帝から命を受けて渡来した。

－　さて、始皇帝の命と金さえあれば、五穀の種は集めることはできるが振男女＝童男女３０００人はどうやって集めることができたか？　仙人の要求で渡す子供達は、それに相応しい優良な、育ちの良い子供達と言う条件がつくはず。どうやって、徐福は集めたのだろうか？　未知の海外へ送り出し、仙人に献上され、戻ってくることの無い条件で、どうやって、良家から子女を集めたのか？　普通の親は、絶対に、子供達を手放して、得体のの知れない仙人に渡すことは、絶対に無い。それも。もし、始皇帝の権力で強制したとしても、トラブルになることは、間違いない。人攫いのような行為で集めたとしても、それは、仙人への貢ものとしては、不適当だろう。

－　どうやって集めたのだろうか？　民族絶滅の危惧をひしひしと感じている徐福の同族、東夷・倭人の仲間に、、内密で、集団移住計画を伝え、移住に賛同した子供を持つ家族を集めたと想像すると、大きなトラブルも無く、集まる。そのことを、怪しいと気がつた地と人がいたとしても、秦の役人に訴えて、受理されたとすると、その訴えた人は、子供達を差し出すか、集めなければならなくなる可能性があり、誰も、文句は言えないことであったと推定。

・徐福一行の構成員＝子供達を差し出し、同行をする人々

Ⅰ　斉の徐福村とその近郷に住む東夷・倭人、

Ⅱ　蜀の倭人

Ⅲ　田氏と陳氏の一族（倭人）

・Ⅰ斉の徐福村とその近隣に住む東夷・倭人が構成員とされる理由

－　徐福村に残されて伝承と家系図。伝承では、徐福出航後は、徐姓を名乗ることを止めるよう徐福に告げられ、姓を変更し、現代に至っている。（徐福が帰らないことを前提に出航し、始皇帝の処罰が残された徐福姓の縁者に下されないように配慮したものと云われる。又、家系図が残されており、徐福一族であったとの家系図が残っている。徐福村とその近隣に徐福の親戚・縁者＝東夷・倭人が居て、行った人、残った人がいたものと推定。

－　次の頁へ

徐福一行の人員構成　その②

・Ⅱ　蜀の倭人について：中国の西の奥、長江の上流域の現代の四川省で古代には蜀と云れた地域にいた倭人が構成員と推定される理由は、

日本の風習・食生活として、蜀・雲南と同様のものが多く見られること。納豆（特に東日本のネバネバした納豆）、蒟蒻（こんにゃく）、いずれも。、中国の外の地域では見られず、雲南・四川のみ）、鵜飼、雲南の鵜飼は、日本の鵜飼よりも人と鵜の関係が密接で若干の違いは見られるが、類似している。

秦の始皇帝の軍隊は主要な3グループに分けられる。秦本来の部隊、蜀の部隊、西方外人部隊。秦が、その早期に戦い取った蜀の軍隊を取り込み、秦の全国制覇の主要な部隊として用い、始皇帝の信任も厚かったとのこと。兵馬俑に蜀の兵士が多く見られることでも判る。

徐福が、最初の渡航後に、秦に戻り、最初の渡航の失敗、又は困難な状況を、始皇帝に伝え、連弩などの武器を携えた部隊の追加派遣の許可を得た。この時に、「戻っても殺されないか?、再渡航のチャンスはあるか?」この判断材料を、徐福に問われ、調べて伝えたひとが居るはずと推測。渡航失敗し、報告して許された前例を知り、始皇帝の意向の判断ができるレベルの高官が居たはずと推測。この人は、徐福の民族大移動の意図を理解しており、バックアップしていると考える。こう云うひとが居なければ、徐福の帰国と再渡航は無かったと思える。この人は、徐福と同じ斉の国の人ではありえない。斉は最後まで、秦と敵対していた国であるから。そうすると、秦の軍又は役人になっていた蜀の人で、徐福と同じ日本語を話す倭人であったと考えたい。

蜀に居た倭人は、不老長寿の薬である「暢」を周の王に献上したことで知られている。

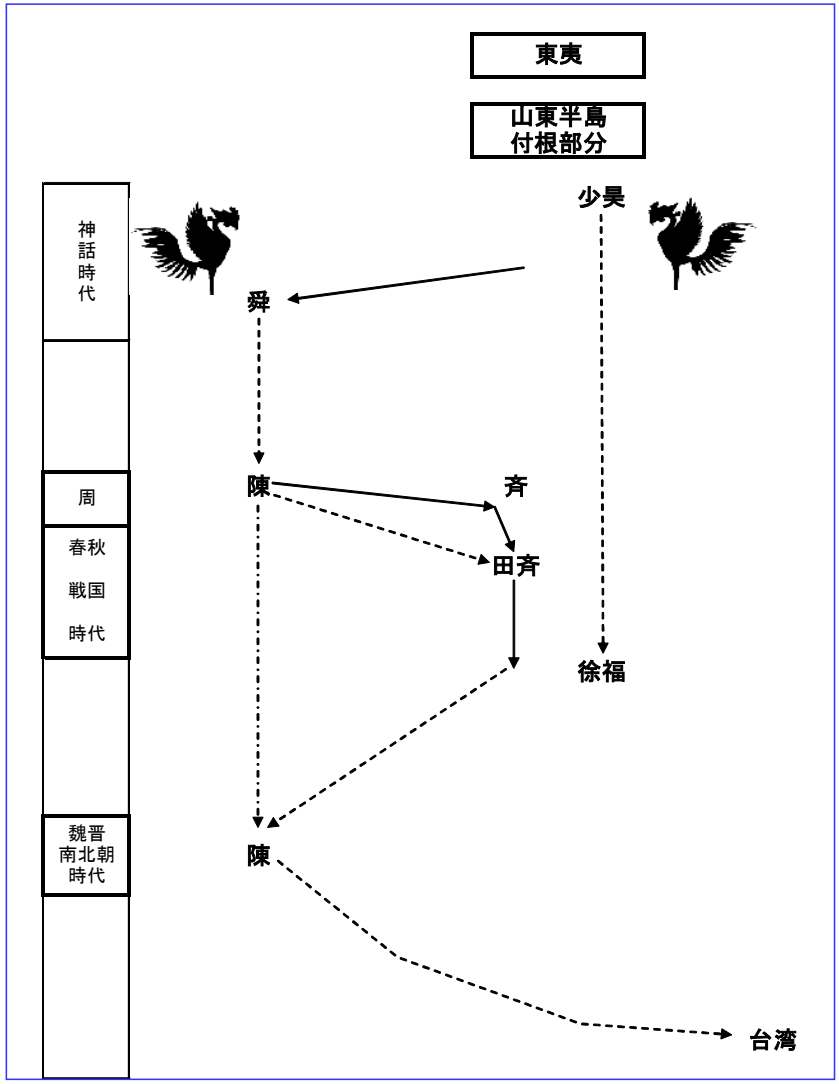
・「倭人」が、中国の歴史書の中で、初めて現れたのは：天下太平を謳歌した周の第二代成王の御代のことが『論衡』の記事に見え、「成王時、越常、雉を献じ、倭人、暢を貢す」とある。「越常」は越の国のことで、又暢（ちょうそう）を周王朝に献上したという倭人は、四川省成都を中心とする地域にた蜀の国人のことである。」「又、その『ちょうそう』は『山海経箋疎』に茸類に属する霊芝のことだと記されているが、……中略……不老長寿の妙薬として賓客に提供する貴重なものであった。」ー鳥越憲三郎著「古代中国と倭族」より

倭人の埋葬法である甕棺は、長江中流の彭頭山遺跡（紀元前6000ー7000年）で発掘されており、時代が下ると、長江下流域で遺跡が発掘される。又、上流の蜀・雲南から、サルウィン川・エーヤワディー川を下り、インドに渡ったタミル人が甕棺で埋葬している。倭人が、蜀に居たことはこの事実からも納得が行く。

不老長寿の薬の伝統（伝説）を持つ倭人が蜀に居り、その倭人が秦軍に組み込まれた蜀軍に入り、秦の始皇帝に会い、何らかのことで知り合っていた東夷の倭人を不老長寿の薬のことで引き合わせたものと、推論する。

蜀の倭人達は、徐福の計画が始皇帝の命令を受けてから、大船団を建造し、出帆するまでに、蜀から大移動してきたと考える。

徐福一行の人員構成　その③



- Ⅲ　田氏と陳氏の一族（倭人）

弥生の渡来人の末裔のDNAの研究で、Y染色体のO2b1はほぼ日本人にだけが持つ遺伝子で、その外には、8家族の台湾人に見られる。この台湾人は、祖先が黄河の南の河南省から逃れてきたとの伝承を持ち、2家族の苗字は「陳」と言う。この「陳」氏の系譜を調べた結果を後述する。

陳国の王族の一人が、斉の国に亡命し、途中から斉の国の王となり、秦の始皇帝と最後まで戦った。その王は、田と言う苗字を名乗っていた。陳国は。、周の時代の早い時期に滅びたが、その一族は、田氏を頼り、斉の国に移住していた。

その人達も、DNAから判断すると、東夷倭人の一族と云える。

この田と陳の一族が徐福と共に、民族大移動のための大船団群を建造し、操船技術を持ち、渡航を可能にしたものと推論。

特に、徐福の2回目の渡航では、連弩などの武器を持ち、主要な構成メンバーであったと推定する。

弥生時代の始まり

九州地区だけではなく、日本海側の秋田・青森まで、太平洋沿いに四国から、紀伊半島、伊勢渥美半島、駿河、伊豆、房総、鹿島まで、もちろん瀬戸内海沿岸と黒潮に沿った稲作に適した地域に上陸した徐福一行は、新天地で、のびのびと水田耕作と豊な暮し始めた。水田耕作の新農業技術と、秦の始皇帝の圧倒的に優れた鉄製の武器を持った人達は、豊富な食料を得て、温暖で快適な地で、人口を急速に、爆発的に拡大していったと推定する。

- 先住の縄文人とは、当初住み分けから、平和裏に、交流が進んだ。
- 支配階級となった徐福一行の言語が、日本の統一言語となった。
- 高床の住居・鳥居を建造、布を織り、青銅・鉄を使い作られた農工具が利用された。

徐福一行の文化・言語が、黒潮・対馬海流の沿岸から日本各地に急速に広がった。これが、弥生文化と名づけられ弥生時代となった。

弥生人達は、日本各地、韓国南部に移植した仲間達とも交流し、中国本土の情報も入手していたものと推定。

- 漢の時代に、使節を送るもの百ヶ国と記録されるほど、情報と人員の交流があったと推定。（後漢書・魏誌倭人伝）
- 弥生中期から後期の土器に船の線刻画があり、これを復元すると、36本の櫂と中央に帆柱長さ25mの船で、船員だけでも37人乗りのゴンドラ型外洋船
- AD八世紀の記紀の記録に、長さ十丈（30m）の船の記録あり、常陸風土記には、長さ十五丈（45m）の船の記録が残されている。

北九州地域では、

- 縄文人を長に持つ集団との、激しい戦いの後遺症が残り、環濠集落、など戦への備えが解かれない状態が残ったものと推定。
- 魏誌倭人伝に記録される、伊都国の北の国々を牽制するために一大率を置く状況や、国々乱れ相戦う状況が発生したものと推定。

弥生時代を牽引した水田稲作に関しては、稲作の発祥から後述の「徐福の居た時代までの中国についての理解」「その②-1　稲作の発祥と伝播」以降を参照下さい。

人口の増加率

・考古学・歴史学の中で、渡来人の人口増の原因として、数世紀の間に、百万単位の人と渡来が必要としている説もあるが、種籾から生産道具、開墾用具を持ち込んだ1万人がいれば、十分と云える。

・水田・稲作の拡大に伴い、渡来人の人口は拡大した。この増加率と人口増の数値を試算してみる。

・参考データとして、昭和の20年から51年の30年間の人口増加率を使用する。この期間には、国外との人口の流入・流失が取り立てるほど無く、産業構造の変化で、人口増に耐える経済状態があった。従って、人口増に見合った十分な食料事情がある場合に、人の営みとして、どの程度の人口増が可能なのかを示す、好例となる。

・日本の人口は、昭和22年に、78百万人、51年には113百万人。45%の人口増があった。平均年率では、1．25%。

・この年増加率「1．25%」を、1万人に適用してみると。

- 30年後　14，585人
- 100年後　34，634人
- 200年後　119，952人
- 300年後　415，441人
- 400年後　1，438，841人
- 500年後　4，983，287人

2014年3月
計算に間違いあり
訂正

・徐福一行が1万人で、BC210年に到来したとし、その中だけで婚姻を重ねたとして、約500年後の西暦300年には5百万人にまで増加することが有りうることになる。徐福一行と縄文人の婚姻・混血が進んだとすると、もっと急激な渡来系の人口の増加が可能だったと考えられ。（人口増に耐える経済状況が制約）

・因みに、縄文時代末期の縄文人の人口は、20万人と云われる。

・水田稲作で人口の増加の激しかった平坦地に住む渡来人と、その増加を山間地から見ていた縄文人との交流の度合いが、現代に繋がる日本人形成におおきな影響があったと考える。早い時期から縄文人が、渡来人と交わっていたものと想定される。これは、縄文・アイヌ系の男性遺伝子（Y遺伝子）の比率が約50%と現代のDNA調査で判明していることからです。又、山間部では縄文・アイヌ系のY遺伝子の比率が多い事も、説明がつく。

弥生時代を拓いた渡来人

- 紀元前219年～210年にかけて渡来した3000人の幼い男女を擁した徐福一行が、対馬海流と黒潮に沿った地域から拡大し、縄文人と混血を重ねて、弥生人を形成していったことが判った。
  - もし、徐福が漢語を母国語とする漢人であったなら、弥生人は、漢語をしゃべってに違いない。併し、弥生人は、縄文人の言葉(アイヌ語)ではなく、日本語をしゃべっている。
  - これはどうしたことか？
  - すると、この徐福一行の正体は、どんな人達だったのだろうか？ 何語をしゃべっていたのであろうか？
- 弥生人・日本人とは、どんな特徴を持っているのであろうか？
  - 魏志倭人伝の記述では、東夷・倭人と云われた。
  - 海に潜り、漁労に長け、刺青をし、貫頭衣を着ていた。
  - 吉野ヶ里遺跡から、鳥を二羽乗せた木の門＝鳥居が発掘され、甕棺で埋葬された。
  - 盆と正月・小正月の行事、門松、注連縄、墓参り、山ノ神・田の神、太陽への崇拝、八百万の神
  - これらの特徴は、徐福の生地のものと似ているだろうか？

古代中国と倭族　鳥越憲三郎著
ワ族の貫頭衣

弥生ミュージアム　第4章より

徐福の時代までの中国についての理解

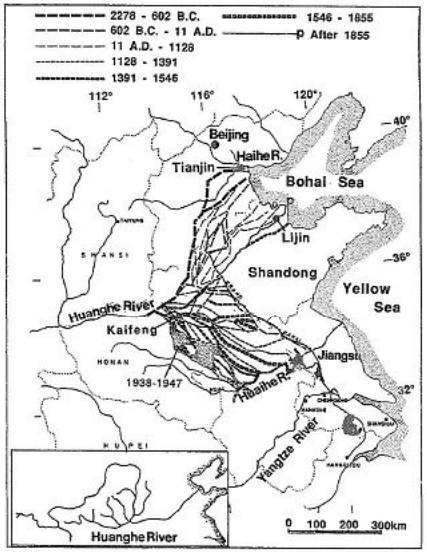
- 中国「四千年」の歴史と云う言葉が、怪しくなってきている。もっと長い古い、歴史が発見され長江文明と名付けられている。
  - 1973年に発掘された河姆渡遺跡から、紀元前五千年前（今から7千年前）の水稲栽培・高床式住居・紡績用の道具・陶器・船を模った土器など、従来の常識を覆す発見がなされた。この長江の下流域で発見された文明は長江文明と云われるようになり、四千年の黄河文明よりもずっと古い、高度な文明が存在したことが判明した。
  - 長江の中流では、更に古い遺跡が発掘され、仙人洞・呂桶環遺跡（せんにんどう・ちょうとうかんいせき）では一万年以上前の栽培稲が見つかった。長江の各地で古代文明の遺跡が次々に発掘され、新しい歴史の見方が生まれた。
- 古代の中国を理解するための事象
  - 文明の母と大河が云われるが、黄河の流れは古代は現在と異なっていることが判っている。現在では遠く隔たっている、黄河と長江は、実は古代では極めて近いことを示している。
  - 稲作の起源と稲の種類、栽培方法の特色は、古代文明の伝播をトレースする根拠となる。このルートも整理しておく。
- 「殷」（商）と「夏」の発見
  - かっては、周以降が歴史と認められていたが、占い用の甲骨文字の発見から殷と殷墟が発見され、実在の証明された時代が遡った。近年、「夏」の遺跡も発見され、実在が証明されており、中国の歴史・考古学の次の目標としては、神話の時代の実在証明・究明に、むかっているとの事。
- 実在証明のターゲットとなっている神話の時代は、黄帝から堯・舜・禹までの時代。
  - 殷・周の成立にも大きく関わっている神話の時代は、中国民族のルーツを溯ることであり。それがなんと、日本人の血筋にまで、繋がる。
- 徐福とその民族の背景を理解するため、中国とその文明の歴史を遡って、見る。

徐福の時代までの歴史　その①基礎事実

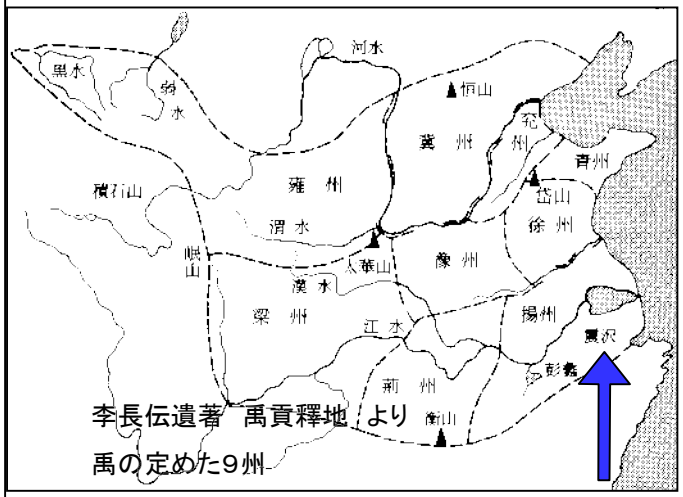
- 中国の歴史上で、長江文明と黄河文明の係わり合いを考察するときに、現代の地図で考えてはいけない。両文明の母である両大河の古代の川筋は、現代と違っていたので、その時代の地図で考慮する事が必要。
- 洪水を引き起こし、問題であった黄河は、紀元前2070―1600年に「夏王朝の創始者の禹」が改修し、現代の流れの北方の川筋に変更した。それ以前は、今の准河に合流していた。
- 古代の長江の下流と黄河の下流は近接していることに留意。
- 河姆渡（かぼと）文化、良渚（りょうしょ）文化は長江文明発見の端緒となった重要な遺跡。

黄河の川筋は、古代・禹の改修後-1128年・-1546年・-1855年・-現代と大きく川筋を変えている。

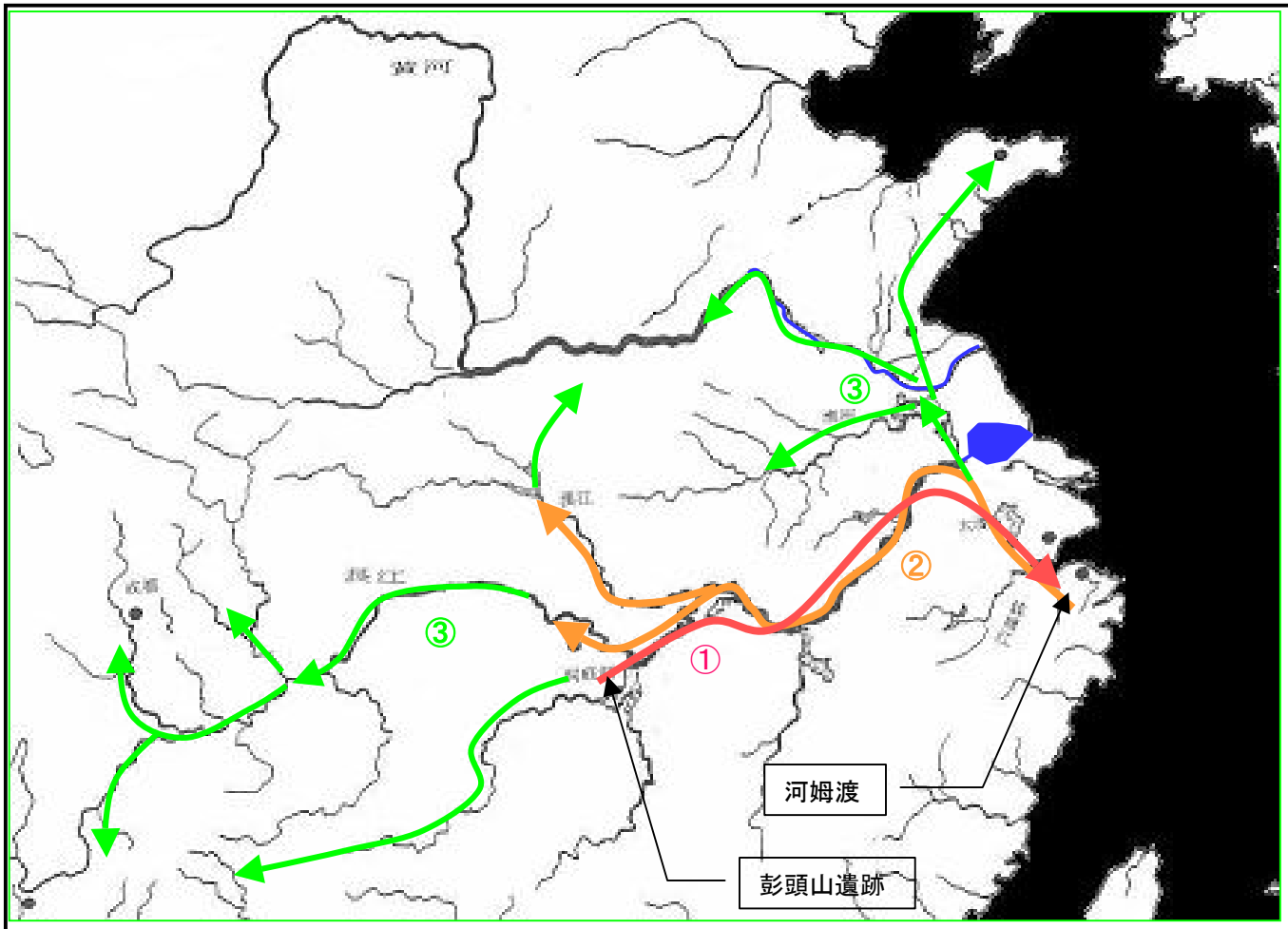
東シナ海陸堆積物に記録された甲がの河道変遷と人為的影響1994年より



第１図　BC2278年から現在までの黄河の河道変遷図.
Shen (1979)，成(1991)，ほかをもとに作成.



その②-1　稲作の発祥と伝播（日本へ）



- かっては、稲と稲作の発祥の地はインドアッサム地方・中国雲南地方と唱えられていたが、その説は完全に否定され、現在は長江が発祥の地と確定した。
- 稲作は、長江中流が最も古く、彭頭山遺跡BC7000年―6000年。次いで長江下流の河姆渡遺跡がBC5200年。
- BC5000―3000の稲作の遺跡は河姆渡のある江南地方と長江の下流と中流域に限られる。
- BC2100年以降、長江の上流や、准河、黄河中流域に伝播

中国の古代稲・稲作農耕文化に関する遺伝・育種学及び考古学的調査研究　1992年度～1993年度　の図表から

黄河と長江の流れを変更

その②-2　中国の古代稲・稲作農耕文化に関する遺伝・育種学及び考古学的調査研究

1992年度～1993年度　和佐野 喜久生　佐賀大学・農学部・教授　の報告から抜粋

(1)（(中国の長江中流域の遺跡)）　城背渓および彭頭山遺跡文化(紀元前6000―7000年)の陶器片および焼土中に多くの籾・籾殻・稲わらの混入が発見されたことから稲)が多く生育していたと考えられる。彭頭山遺跡の籾粒は6ミリ前後のやや短粒であった。

(2)古代稲粒の大きさ・形の変異の状況および稲作遺跡の時代的新旧の分布状態から、東アジアの稲作は、長江の下流域・杭州湾に面した河姆渡および羅家角両遺跡を中心とした江南地方に、紀元前5000年以上遡る新石器時代に始まったと考えられる。

(3)長江の中流域には、稲粒が発見されているが、稲作農耕の存在を証拠づけるものがまだ発見されていないこと、河姆渡および羅家角両遺跡と同時代の紀元前5000年頃の稲作遺跡が存在しないこと、中流域に分布する多くの遺跡が紀元前3000―4000年のものであること、などから、稲作は下流域から伝播したものと考えられる。

(4)長江の最上流域の雲南省の稲作遺跡は紀元前1000―2000年の新しいものであり、稲粒も粒が揃った極端な短円粒であること、、稲作のアッサム・雲南起源説は考えられない。アッサム・雲南地域は、周辺地域から民族移動に伴って生じた稲品種の吹きだまり(遺伝変異の集積地)の可能性が強いことを提唱した。

(5)黄河の中下流域の前漢時代の古代稲は、長大粒で日本の現在の栽培稲とは明らかに異なるものであったが、**淮河流域の西周時代の焦荘遺跡の炭化米は、粒形がやや長粒で九州の弥生中期の筑後川流域のものによく類似した。**

(6)遼東半島の大嘴子遺跡、松菊里遺跡

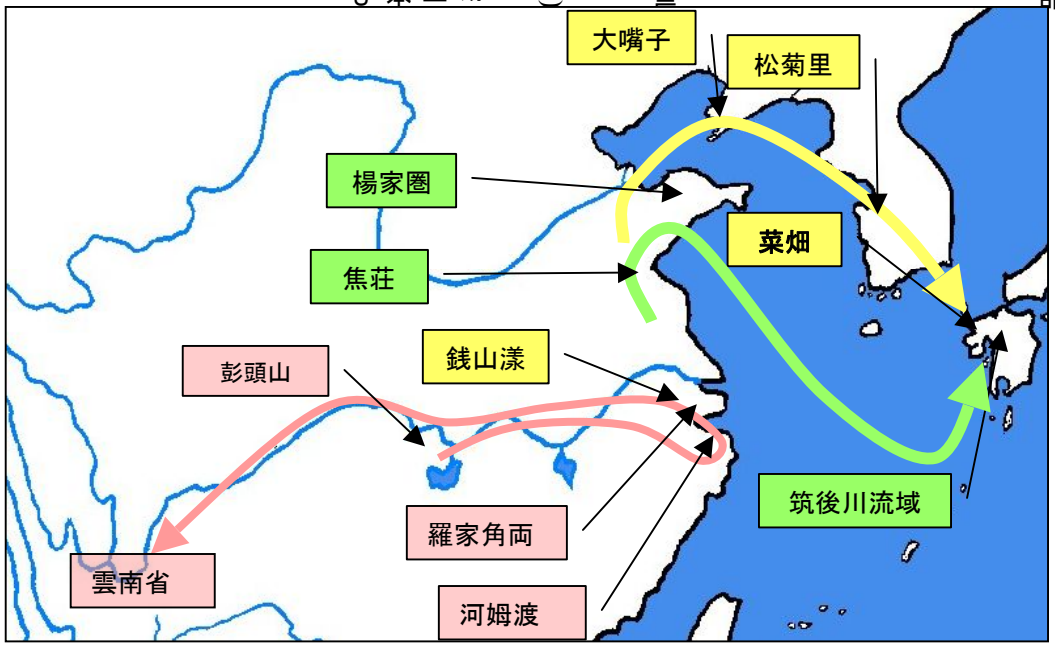
(紀元前500年)、および日本の北部九州最古の稲作遺跡・菜畑遺跡のやや小粒の古代稲粒は、浙江省呉興県の銭山漾遺跡の炭化米粒の中に類似するものがかなり見られた。

このことは、日本への最初の稲作渡来が江南地方から中国大陸の黄海沿岸に沿って北上し、遼東半島から韓国の西海岸を南下しながら北部九州に上陸した可能性を示すものである。この品種は、九州玄界灘沿岸の縄文晩期・弥生早期の遺跡に限られる。

(7)**山東半島の楊家圏遺跡(紀元前300年)の焼土中の籾粒は日本の品種によく類似した**が、遼東半島の大嘴子遺跡の炭化米は短狭粒で、韓国の松菊里遺跡(紀元前500年)、あるいは日本の北部九州の古代稲粒のいずれとも異なるものであった。

このことから、**稲作が朝鮮半島の北から内陸を南下したとは考えられない。(海路が示唆される)**

粒形のやや長粒のこの品種が弥生中期以降の遺跡で見られ、日本各地に広がっている。



その②-3　稲作・水田に関して

・BC219年の徐福の時期の日本の農業について
　－　稲作に関して（DNAから見たイネの道：佐藤洋一郎氏の書籍より）
・縄文後期以前（約六千年前）より焼畑や、「原始的天水田」で、熱帯ジャポニカ米の耕作が始まっている。
・温帯ジャポニカ米の一部は朝鮮半島経由の経路がある。
・SSR多型の研究から、朝鮮半島を経由せず、直接中国から日本へ来た経路が設定できる
・水田は、急速に北進している。この急進を可能にした条件は、縄文時代から存在した、熱帯ジャポニカ米と温帯ジャポニカ米の自然交配。交配の第二世代には20％の早生が出現し、日本列島を北方に駆け上がる可能が出る。

・焼畑耕作と水田耕作の特長

・焼畑耕作は、一定の耕作領域を焼き払うことで、灰と言う優れた肥料と雑草の種の無い耕作地に、先を尖らせた棒で穴を開け、種籾を蒔くことで、現代の水田耕作の七〇％に匹敵する収穫量を得られる優れた耕作方法。特別な道具や集約した労働力も不要。この焼畑耕作に必要のことは、優れた種籾と、この簡便な耕作技術の習得。もし、種籾を持って、焼畑耕作を行ったことのある家族が渡来すれば、この農法の伝達と拡散は可能。
・焼畑耕作の難点は、数年すると、肥料分が減少し、雑草が茂り、急激に収穫量が減少する事。耕作地を数年毎に順次移す必要あり。
・縄文時代五-六千年前、中国の長江下流で行われていた稲作で使用されていた種籾と焼畑耕作の経験を持った小人数の人が渡来する事により、焼畑・稲作の伝播は可能だった。もしかすると、縄文人が、中国に渡り習得した可能性も否定できない。「九州佐賀産の黒曜石（石器の原材料）が海を越えた沖縄でも発見されることから推測」
・水田耕作を行うには、土地の測量・整地、水田造成の道具と技術と大規模な労働力が必要。又、耕作自体には、播種、田植えの時期を決める暦と農耕技術が必須。焼畑・稲作のように少人数・単発的な技術の伝播では不可能で、水田・稲作が伝播するためには、確立された総合的技術と、整地・耕作の道具・器具および管理能力を持った集団の渡来が必要。
・日本全域に極短期間に水田・稲作が伝播した事実は、水田稲作伝播の準備を整えた集団が、一気に、多数の集団で、日本各地に渡来したことを示している。

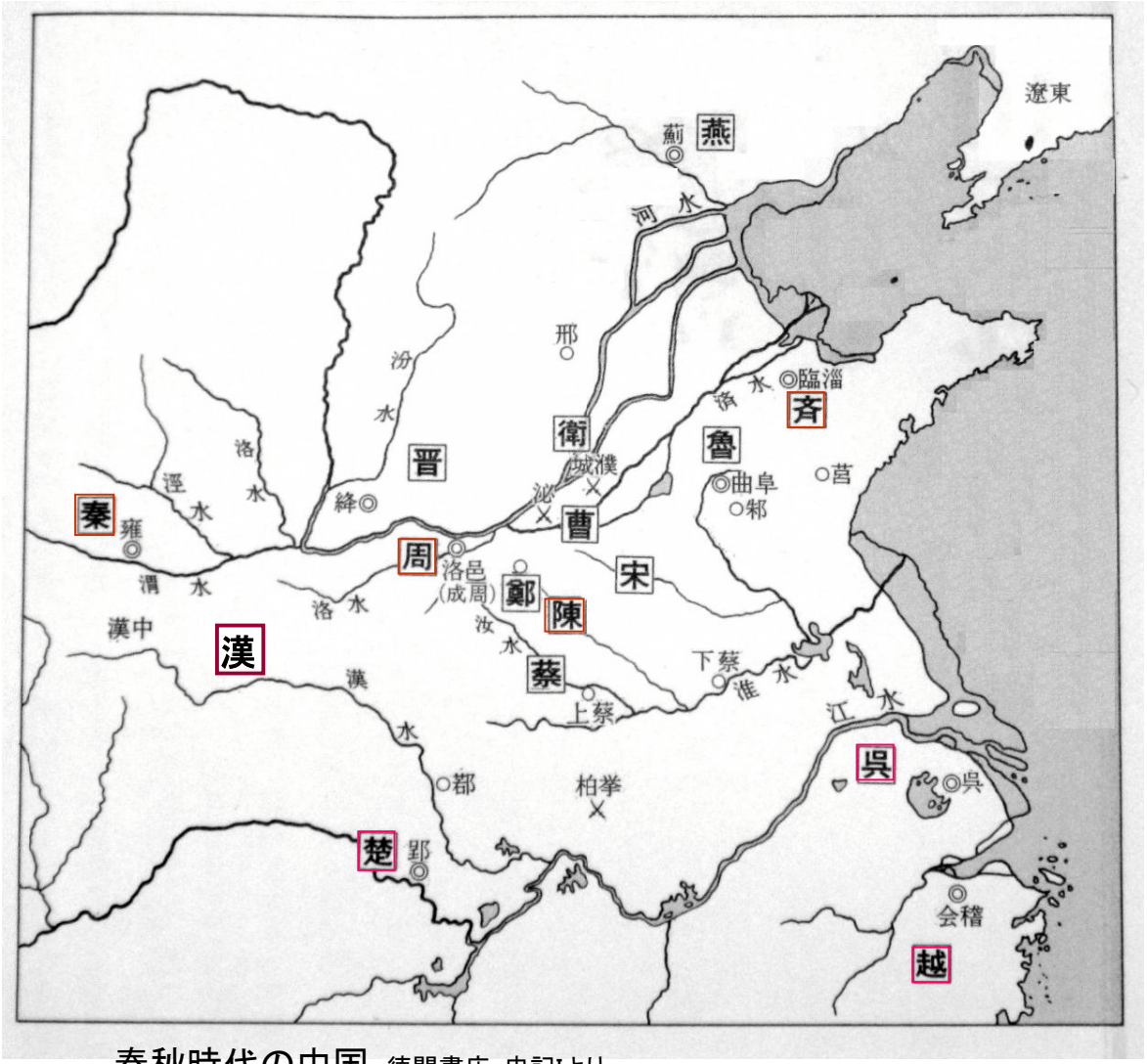
神話の時代から夏・殷・周を経て三国志の時代まで

年代	年数	王朝	王	日本
伝説の時代		三皇五帝の時代	神農　黄帝 太昊（センギョク）　少昊 炎帝 堯　舜	縄文海進
BC2100（2070）	500年	夏	禹 － 桀	縄文時代
BC1600	573年	殷（商）	湯王 － 紂王	
BC1027	257年	周（西周）	武王	
BC 770	367年	東周	春秋時代 斉・鄭・宋・晋・秦・楚・魯・呉・越	
BC 403	182年	戦国時代	韓・魏・趙・斉・燕・楚・秦	
BC 221	19年	秦	始皇帝	
BC 194	225年	漢（前漢）	高祖（劉邦）	弥生時代
AD 23	197年	後漢	光武帝	
AD 220	45年	三国時代	魏・蜀・呉	曹操・劉備・孫権
AD 265	39年	晋	武帝（司馬炎）	

- 暦年の確定していない伝説の時代が三皇五帝の時代。
- 発掘された甲骨文の解読と王城遺跡の発掘によって、殷王朝の実在実証された。更に、１９８０年代の発掘から夏王朝の実在が確認された。伝説の時代の黄帝―堯・舜の実在の証明についての、今、注目が集まっている。
- 今後の記述で注目する斉と陳の国は、ＢＣ１０２７年の周の発足時に設立された。
- 周の出自は黄河中流と云われる。それ以前の王はいずれも、夷人と記録されている。舜は東夷の人（孟子）。禹は長江上流の四川省の生れと云われる。
- 現在の中国国民を代表している漢族が、初めて中国全土を制したのはＢＣ１９４年の漢（前漢）の時代から。その直前が、徐福一行は出帆した秦の時代。
- 邪馬台国の件で有名な魏志倭人伝の朝献は、ＡＤ２３８年。三国時代の終盤、
- 尚、ＢＣ３０００年（今から５０００年前）は、温暖化が進み、最も海面が高くなり、日本では縄文の海進と云われ、関東平野では足利・桐生近くの岩宿近辺まで海が入り込んでいた時代。中国でも、黄河流域は森林で覆われ、象が生息していた温暖な時。

春秋時代の主要国の位置関係

- 黄河は現代の流れより更に北方を流れていた。
- 黄河中流域の洛陽の都の近くから下流域に周があり、中原と云われる中国史の中心地。



春秋時代の中国　徳間書店・史記Iより

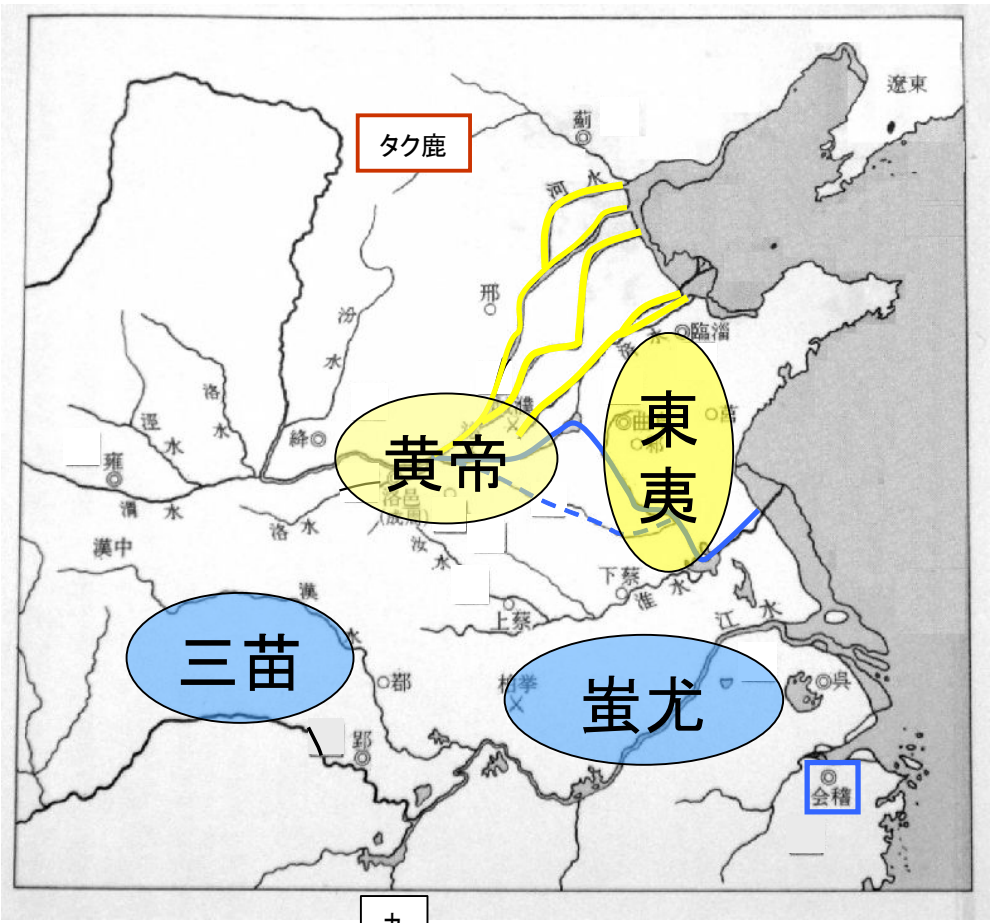
- 秦は西に、注目する斉は東の山東半島近くに、そして陳は中原の南に位置した。
- 呉と越は南の長江沿いに、越は長江の中流域にあり、後に中国を代表することになる漢は長江の支流の漢江に位置した。

中国の古代史　　神話の時代

・黄帝中央で国を治め、その四方を東・太昊、西・少昊、南・炎帝、北・センギョクが治めていたと云われる。

・銅の頭に鉄の額を持つと云われる蚩尤（しゆう）が三苗と組み、黄帝に戦いを挑んだ。蚩尤は製鉄、兵器、船を発明したとも云われる。

・黄帝は苦戦のあと、北のタク鹿の地で、蚩尤を滅ぼした。刃向った三苗の粛清を行った。



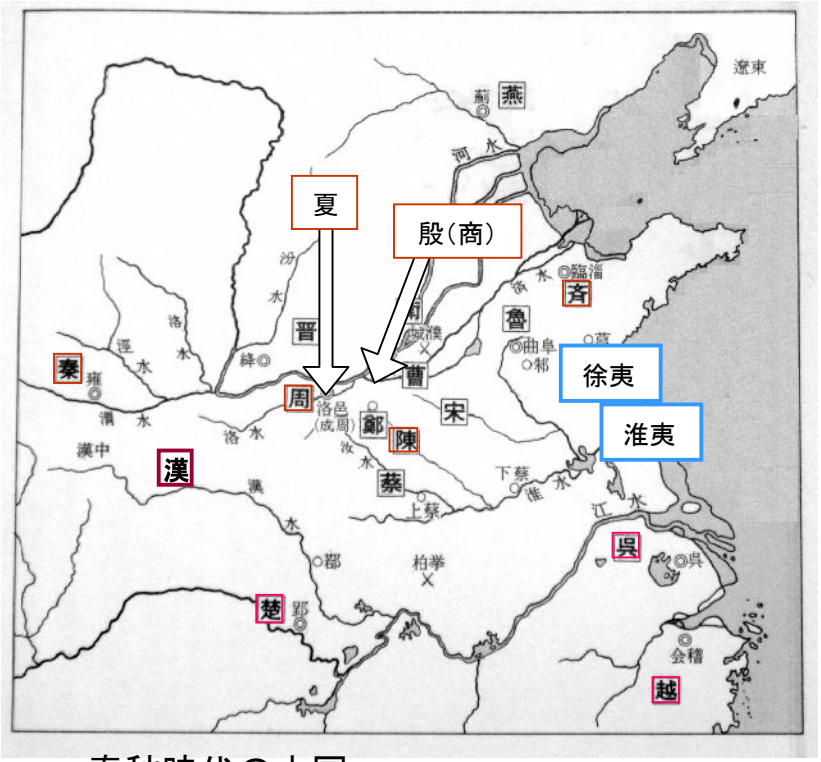
・舜は東夷の人で、神鳥の鳳凰に因む伝説を持ち，長江の雷沢で漁業を行った。聖王と云われる堯を継ぎ、三苗と戦い、南方の蒼梧地で亡くなり九疑山葬られた。又、殷民族が祖先として祭る。

・舜を継いだ禹は、蜀（四川省）の生まれとの説がある。治水事業に打ち込み、黄河の流れを北に導き、洪水の災いを防いだ。治水の結果、九州を治め、「夏王朝」を起こした。巡幸中、会稽で亡くなり会稽山に葬られた。

・禹の時代にやっと温暖化が収まり、やや寒冷化が始まり、雨量が減少し、洪水の発生が減少した時期にあたるとの説もある。

中国の古代史　　歴史時代

・実在が確認された夏王朝を倒した殷(商)が王朝を立てた。
・次に、周王朝がスタートした。周は封建制を敷き、同族の一族などを諸候に封じて、諸候国を各地に建て治めた。その諸候国のひとつに「舜」を祭るために「陳」を建てた。又、東方には周成立に大きな功績のあった太公望を封し「斉」の国を建てた。
・周の成立の直後、殷の残党と結んだ「東夷の淮夷」の乱が発生、平定される。その後も度々、淮夷・徐夷は乱を起こしたと記され、越の勾践によりBC470年頃滅亡。
・「呉」も越の勾践により滅んだ。



春秋時代の中国　徳間書店・史記Iより

・春秋と戦国の時代に各国が並び立っていたがその中でも「斉」はその雄を云われた。
・秦は、蜀を収め、その戦力を中に取り込み、戦国を制し、「斉」を滅ぼし、中国を統一し、皇帝となった。
・その秦が滅び、楚との戦いにも勝ち、漢が主役に躍り出た。
・後漢のあと、再び戦乱の時代に入り、魏蜀呉の三国時代になり、統一を果たした魏の将軍司馬威が「晋」を打ち立てた。

大人数の移民が可能な船舶・航行技術があったのか？

・秦の始皇帝の時代に、徐福一行が3000人の子供達を含む大量の人員で、民族移動することができるだけの船舶と航行の技術があったのか？を検討して見る。

・斉の国は、塩・鉄の産地で、造船・海運・海軍の技術の最も進んだ国で、優秀な海軍を持っていた。

・徐福が出帆するBC210年より前、BC500年頃、斉の国とその南方の呉と越が、海上の三強」と称された。

・中国史上、初めての本格的な海軍の戦争・海戦はBC485年、呉王が水軍を率いて、斉の海域で戦ったもの。呉が破れ、勝った斉は「海王の国」と呼ばれた。

・その3年後、越は2千人の水軍で呉を攻めた。これにより、呉は滅亡。（遺った呉の一部が、韓国と日本へ逃れた。）BC472年、越は8000の水軍と300隻の軍船で、斉に遠征し、勝利を収め、何と、都を本拠地の会稽から斉の国の瑯琊に移した。その結果、越の、船舶の設計・造船・操舵の技術の粋が、斉の瑯琊に集結。

・この頃の記録に残る呉の軍船は、長さ十丈（30m）巾1．52丈（4．6m）、90人乗りだった。このことから、

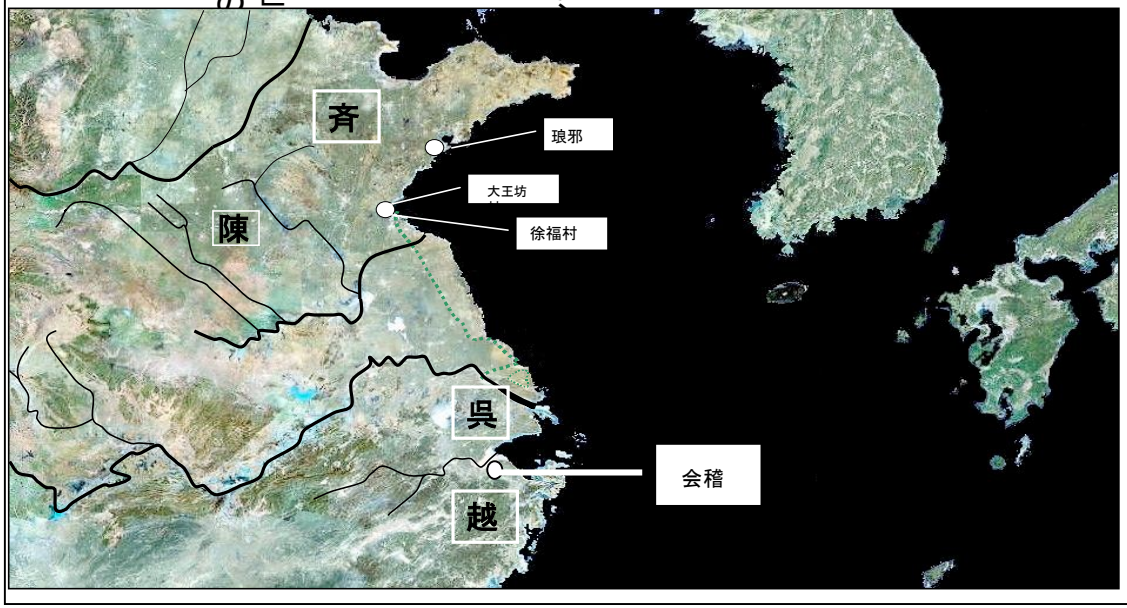
・徐福が出帆する以前に、これだけの大きさと収容人数をもった船舶が、この地域で作られ、運用されていた事が判る。

・越は、130年後の、BC334年に滅亡し、海軍・海運の技術が斉の国に残され、集約された。

・BC221年、中国を統一した秦の始皇帝は、斉の国、瑯琊に、集約された造船・海運・海軍の技術を活用。

・斉の国は、戦国時代、製鉄事業で、全国をリードしていた。徐福村の「宅基地遺跡」からは鉄製の道具とおびただしい冶金の鉄の塊が発掘され、造船に必要な基礎が、斉の国にあったことは明らか。

・始皇帝が、自ら「費やすこと巨万」といった莫大な財力と製鉄・造船の技術が結びつき、この大量の人員を送り出す船舶を作り送り出すことができたものと推定。



中国の古代史　まとめに代えて：中国民族と言語について

・中国は多民族国家と云われている。現代の中国の戸籍登録や公共機関の発行する証明書・免許証には、「民族」を記入する欄があるとのこと。現在55民族が少数民族として認定されている。又、120種類以上の少数民族の言語の衰退と絶滅が危惧されているとのこと。

・現代でもこれだけの多民族と多言語が残っている中国の歴史を遡ってみると、
- 現代の主要民族の「漢人」と「漢語」が中国の主役に躍り出る時期は、決して早くない。BC200年以降のことと言う事は、留意する必要がある。
- 神話時代の黄帝以降を見ても、「舜」は東夷の人と記され、殷民族は祖先として、「舜」を祭っている。「夏」の始祖の「禹」も長江上流の蜀で、誰も「漢人」ではない。
- その外に、大きな勢力を持っていた民族として、呉・越・楚、そして東夷（徐夷、淮夷など九夷）も「漢人」ではない。
- 古代の中国では、多様な民族と各民族の言語が存在し、戦乱のたびに、民族の数が減り、言語が滅んで、統一に向かって行ったものと推定される。
- 呉と越の言語は同根の言語であったと云われ、」呉、越が民族語を放棄したのはBC306年以降と推測される」（《山海?》考古--夏朝起源与先越文化研究」（黄懿陸著）民族出版社2007年8月）
- 秦の始皇帝が、中国統一の一環として行った、漢字と言語の統一が大きな影響を与えたものと推測する。
- 徐福一行が出帆したBC200年頃は、民族とその言語の存亡の危機にあった民族があったものと推測できる。

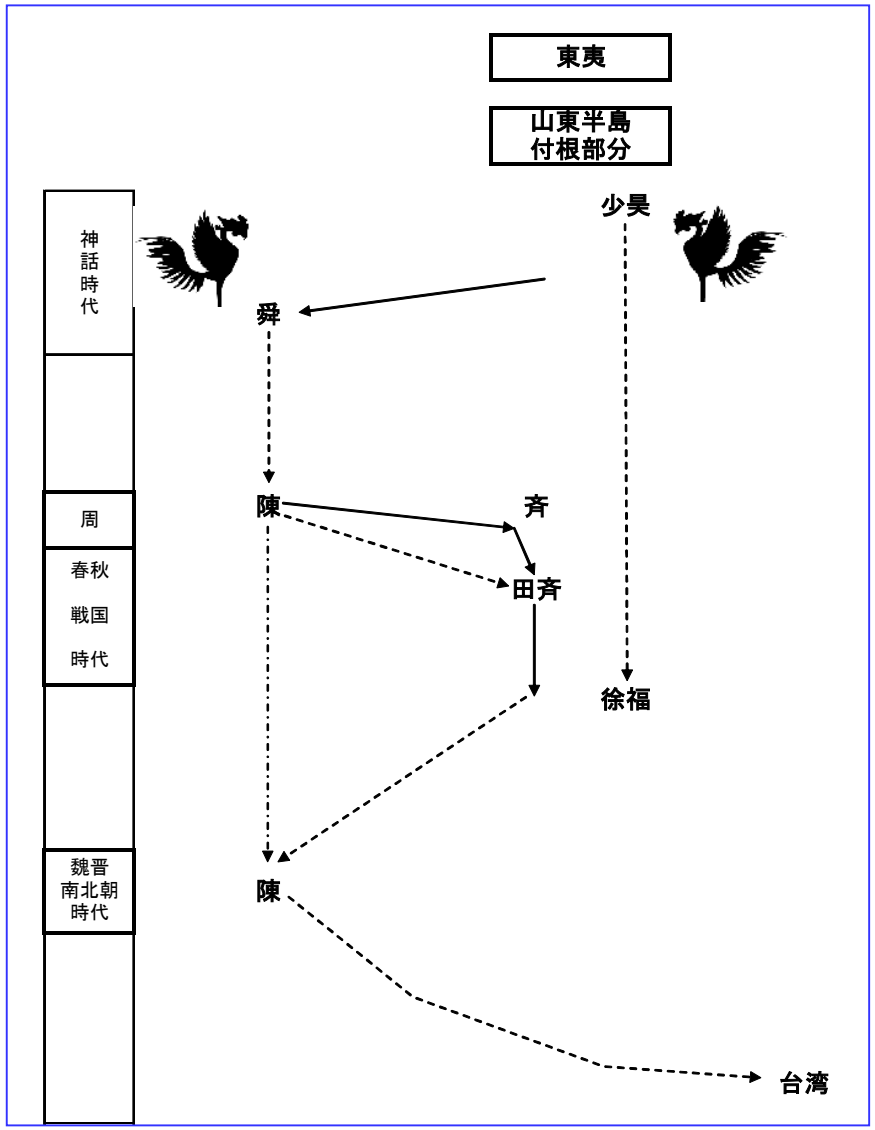
・神話の時代の移動距離と地域の広がりには、驚かされる。
- 北のタク鹿から南の九疑山まで約2000km、西の蜀から東の会稽まで約2200km。一日に徒歩で20km進んだとして、100日の行程。日本の縄文時代の黒曜石の流通距離でも驚かされるが、ダイナミックな移動があったことを、この時代を考える上で、忘れてはいけない。

・鉄の使用開始時期は、意外と早かったこと。
- 黄帝の戦った蚩尤は金属と兵器の発明者との伝説があり、この時代から青銅製・鉄製の武器が実用化されていた。周の時代には、鉄は農具にまで発展した。（改訂鉄の考古学-窪田蔵郎著）

・戦乱の末に滅ぼされた呉、東夷の退避先
- BC1000以降、度々、戦い敗れて行った、大陸東岸の国々は、船舶を使用していた民族で、その滅亡時に船舶で退避したグループがあったのではと想像される。稲の品種から見た伝播経路、韓国・朝鮮の民話に、「徐」の卵生の神話に極類似した話が多いことからも推察される。（古代朝鮮と倭族』鳥越憲三郎著）

渡来人のDNA遺伝子　その①

- 徐福がどんな民族の出身だったのか？
  - 中国に残された徐福一族の系譜が発見されている。（徐福出立後は後難を恐れ徐姓を名乗っていない）。徐福一族は、「斉の人」で、「少昊」の系譜とのこと。
- 遺伝子・DNAの研究成果で、日本人の出自の手掛かりがある。
  - 日本人のY染色体で多く見られるO2b1と言う遺伝子は、現代で20%強の割合を持ち、渡来人の遺伝子と判断されている。この遺伝子は、日本人だけに見られる特異なもので、極めて例外的に、台湾で発見されている。台湾で発見されたこの遺伝子を持つ人の中に「陳」姓の人が複数あり、その人達の系譜が残されている。その系譜は、黄河の南から移り、南北朝の時に「陳国」を建て、その後、流浪し、台湾に移り住んだ。「陳」以外の姓の人達も、同じような経歴の家系とのこと。
  - この家系まで判るDNA遺伝子が、渡来人＝徐福一行の出自を探す手掛かりになるものと思われる。
- この二つの手掛かりから、中国の歴史を振り返り、、渡来人＝徐福のルーツを探って行くことにする。

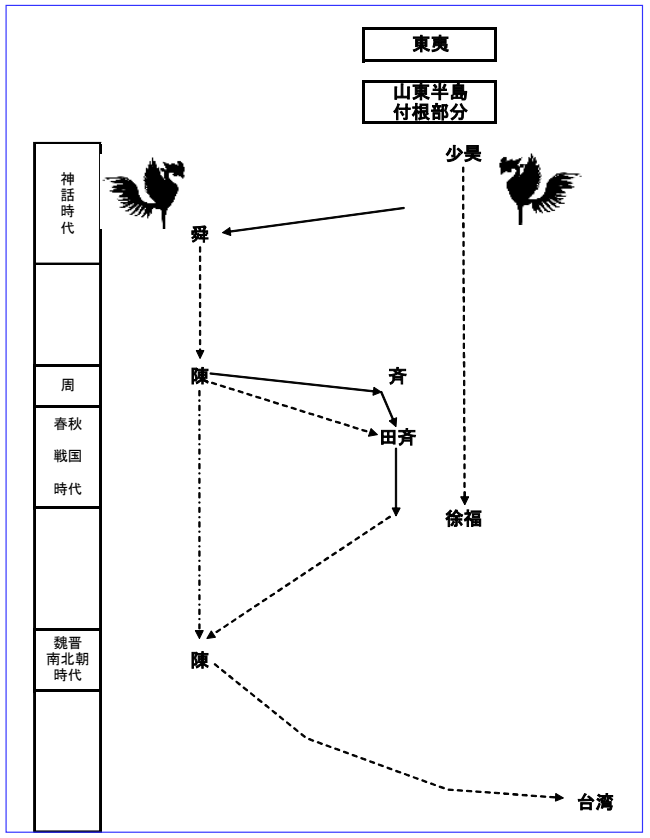


徐福一行の民族・DNA遺伝子　その②

・黄帝のときに西の地域を治めた少昊は、若いときに東方で国を建てたとの伝説がある。その国は、現代の曲阜に在ったと云われ、臣下百官はすべて鳥であったという。

・少昊の一族は、太陽と暦を司ったとのこと。

- 現代の神雲港の雲台三山の東の湯谷で。「恭しく春の日の出を向かえ、季節をわきまえ、人々に春耕に遅れないよう教える祭日を最大の祭典とする東夷、即ち「少昊氏の一族であると記述がある。（李洪甫氏の研究論文：徐福霧のかなたへ、程天良著）



・「陳」氏の系譜

- 舜は東夷の人。神話時代の皇帝。堯の女婿。
- 周成立時に舜を祭る一族を「陳」に封じた。
- 陳の公子が「斉」に亡命し、優遇され、「田」姓を名乗り、力を蓄えた。あるとき、斉の王となったが、その国は「田斉」と云われる。
- 陳は春秋の戦いの中で滅び、残された多くは、「田」氏を頼り、斉に移住した。
- 「田斉」は、秦の始皇帝のために滅亡した。
- 「田」氏ゆかりの地は、山東半島の付け根、神雲港に程近い処。

・徐福の生地、徐福村は、神雲港の北側にあり、「田」氏の極く近隣の地にあり、徐福も「陳」氏も、同じ東夷の人。同時代に滅亡の危機に立っていたことから、「陳氏」が徐福の一行に加わった、または、「陳氏」と徐福は同じ民族であったと推定する。これにより、日本人にO2b1のタイプのY染色体で多く見られることが、説明できる。

弥生時代初期の大変革は、東夷・倭人＝弥生人の民族大移動による

・日本の古代史上の弥生時代に突如起こった文明の異変、そして、日本人の骨格・体格の異変、現代のＤＮＡ・遺伝子の解析から判断される渡来人が、中国で実在が証明された徐福の出帆と結びつけるで、合理的に説明がつくことが判った。

・渡来して日本人＝弥生人となった徐福がどんな人・民族であったのかを考え調べたところ、魏志倭人伝に記される東夷・倭人であるとの確証を得た。徐福は、漢語を話す漢人ではなく、日本語をしゃべる東夷・倭人であったと。

・但し、中国大陸では、少数民族の言語が滅亡・減少し続けており、日本語の痕跡は、発見できず、日本語を話すとは証明のしようがない。

・一般に、言語や風習は、中央の地域では残らず、周辺の、しかも辺鄙な地域で残り、発見される傾向にある。日本語と同じ言語は、中央の中国大陸では残存していないが、なんと、中国から南下し、西に移動したインド大陸で発見される。大野晋先生が発見し、同一性を証明したタミル語である。そのタミル民族は、日本の弥生から万葉の時代の古い言葉と極く類似し、稲作、米作りに関わる単語・風習、甕棺埋葬まで同一で、同一民族と同一言語から生まれたことは否定のしようがない。

・－　併し、大野理論は、インドから日本への直接伝播したとの誤った考えを通したため、賛同できない異論が多く、日本語とタミル語の同一性まで否定されていることは、残念。

・徐福伝説が、日本では伝説のまま、真っ当に取り上げられないのは、中国の礼服を着ている図に、一因があるように思われる。中国人の徐福が日本に来たのならば、何で、中国語が日本の標準語になっていないのか？　俺達、日本人の祖先は中国人ではない。との感覚的な反発がベースにあり、まともに取り上げる意欲が湧かなかったのが、その理由と思われる。

・いまひとつは、日本の沢山の土地に、徐福伝説があることから、一人の徐福が多数箇所で上陸したわけがないとの、疑念もある。上陸の伝説に、中国の史書から伝わった不老長寿の薬を探す話が付加された徐福の伝説は、誰も信じるに値しないと感じさせるものがある。

・視点を改め、日中の考古学の成果、稲作に関する調査、ＤＮＡ遺伝子の研究調査結果を、統合的に見直す事によって、弥生初期の大変革は、徐福一行による東夷・倭人の民族大移動によるものであることが、合理的な説明が出来た、と考えます。

・現在判明されている事実を、論理的につないで、構成したつもりですが、細部に間違いも含まれるものと思いますので、見つかりましたら、ご指摘を頂ければ幸いです。